【学力向上フロンティアスクール中間報告書】

都道府県名	香　川　県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	善通寺市立中央小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	2	2	2	2	2	2	3	１５	２３
児童数	５３	４１	６３	４９	５１	６０	8	３２５	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

一人一人に寄り添った教育活動の推進と
仲間とともに自己実現できる子どもの育成を目指して

――　「わかる喜びと学ぶ楽しさが味わえる学習」の追究　――

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

○　国語科・算数科においては，全学年で
・　子どもの理解度に差が出やすい教科でもあるし，基礎的・基本的な内容の定着を確かなものにしていかないと，次学年や学年が進むにつれて支障をきたすことがある。分かってこそ喜びを，学び合ってこそ楽しさを感じ，子どもたちは意欲が湧いてくると考えられる。
・　１学年においては，学習規律や学習の構えを身に付けさせるために，２学期から実施し，主には，学級解体とする。２学年においては，４１名という少ない人数ではあるが，子どもの実態から，学年解体で実施している。
・　平成１３年度からの研究の積み上げと，子どもの実態から，少人数指導が効果的であり，本校が長いスパンで徐々に進めてきた習熟度別少人数指導が保護者からも理解してもらえるようになってきたので，継続していきたいと考える。

○　理科においては，５・６年で
・　３年から６年までを学級解体で実施することは，時間割編成や学年の学習内容と子どもの実態によって考え直してみると，無理があることから，５・６年に絞って実施している。
・　設備的なことで問題はあるが，理科室の利用度が高く，実験が必要となってくることも考え，５・６年で，学級解体で実施している。

(2)　年次ごとの計画

平成14年度

○　テーマ
一人一人に寄り添った教育活動の推進と
仲間とともに自己実現できる子どもの育成を目指して

○　研究の見通し（仮説）
教師主導の画一的な教育をすれば，個は集団の中で埋没し，自分らしさを発揮することができなくなる。一人一人の能力・適性をよく理解し，また，その子の考え方を尊重していくということは，さまざまな活動に全員が主体的に参加できるということになる。
また，子どもたちは，さまざまな群れの中で学び合い，高め合い，磨き合いながら自己実現を成し遂げていく。一人一人の能力・適性を大切にし，深い子ども理解に努め，より望ましい学習集団の中で，子どもたちが自分らしさを発揮できるような指導過程を推進していくことが，ひいては，子ども一人一人の学力を向上させていくことになるのではないかと考える。

○　研究の内容・方法
①　少人数指導への取り組み
・　少人数指導で期待すること，少人数指導のよさについて共通理解を図る。

・　少人数指導を日常化していくための手だてを研究する。
・　国語・算数・理科の３教科において，学年・教科・単元の特性に応じた学習集団の編成を検討し実践する。
（習熟度別・課題別・均質に分けての指導）

②　学ぶ意欲・学びを支える思考力・表現力を育てる支援の研究
・　問題解決的学習を導入し，学習過程の中に自力解決や学び合いの場を積極的に位置づけ，日々の授業の中で思考力や表現力を育てていく。
・　特に，表現力の育成においては，授業時間以外の場でも表現する機会を設け，職員間で情報交換する。
・　校内研修における研究授業では，自分が実践している思考力・表現力を育てるための手だてを提案し，授業後の検討会で話し合い，まとめたことを次の提案授業につなげていく。

③　評価の研修
・　評価規準・評価基準についての基本的な研修を行う。
・　指導に生かす評価規準・評価基準の作成を行う。

平成15年度

○　テーマ
一人一人に寄り添った教育活動の推進と
仲間とともに自己実現できる子どもの育成をめざして

○　研究の見通し
子どもたちは，学び合いを通して，互いに，磨き合い，高め合いながら，自己実現を成し遂げていく。一人一人の能力・適性を大切にし，深い子ども理解に努め，望ましい学習集団の中で，子どもたちが自分らしさを発揮できるような教育活動を推進していくことが，ひいては，子どもたち一人一人の学力を向上させていくことになるのではないかと考える。

○　研究の内容・方法
①　少人数指導の取り組み
平成１４年度に少人数指導を実施した単元について，再度，分析・考察し，平成１５年度も継続して，少人数指導の効果的な在り方を検討していく。
そのためには，下記のことについて，特に，共通理解を図っていく。
・　習熟度別少人数指導を中心に，課題別・均質少人数指導の学習集団の望ましい編成の在り方
・　子どもたちの実態や学習内容によって，望ましい学習形態の在り方

②　「基礎学力」と「問う力」の定着
少人数指導を実践するにあたって，子どもたちの学力アップを図ることは，当然のことと考える。「思考力」「表現力」を身に付けさせるためにも，平成１５年度は，その基礎的な内容として，意識しながら研究していくことになった。
そのためには，下記のことについて，教師は支援していく。
・　「読み・書き・計算」の力を向上させる。
・　基礎的・基本的な内容を教材研究し，再度，共通理解を図る。
・　子どもたちの学ぶ意欲の向上が不可欠であるので，子どもたちが意欲をもって学習に取り組むための教材の開発や「問い心」を育てる支援の研究をしていく。

③　「思考力」と「表現力」を育てる支援
「思考力」と「表現力」を育てるためには，「学び合いの場」を設けることが大切である。そのためには，下記のことについて，大切にしていきたい。
・　「自分の考えの道すじ」を大切にしたノート指導の在り方を考える。
・　「学び合いの場」を設け，その学び合わせ方や支援の在り方を研究する。

④　評価の研修
・　授業研究を通して，評価基準の見直しをする。
・　日々の授業の中で，一人一人の定着状況を的確に把握し，指導に生かす手だてについて研究する。

平成16年度	○　テーマ 一人一人に寄り添った教育活動の推進と 仲間とともに自己実現できる子どもの育成をめざして ○　研究の見通し 子どもたちは，学び合いを通して，互いに，磨き合い，高め合いながら，自己実現を成し遂げていく。一人一人の能力・適性を大切にし，深い子ども理解に努め，望ましい学習集団の中で，子どもたちが自分らしさを発揮できるような教育活動を推進していくことが，ひいては，子どもたち一人一人の学力を向上させていくことになるのではないかと考える。 そのためには，少人数指導やＴＴ指導の中に，相互交流を取り入れることで，「お互いに学び合び，分かる喜びと学ぶ楽しさが味わえる学習」をめざすことができるのではないか。 ○　研究の内容・方法 ①　少人数指導への取り組み ・　平成１３年度から１５年度にかけて少人数指導を実施した単元について，その成果を分析し，学期に一単元新しい単元を開発していく。 ・　１５年度末に実施したＣＲＴ検査や学習状況調査の結果を分析し，定着状況のよくない学習内容について，より望ましい少人数指導の在り方を研究していく。 ②　「基礎学力」と「問う力」の定着 少人数指導を実践するにあたって，子どもたちの基礎学力アップを図ることは，継続して考える。「思考力」・「表現力」を身に付けさせるために，平成１５年度はその基礎的な内容として，意識しながら研究してきた。引き続き，平成１６年度も下記のことについて，力を入れていく。 ・　「読み・書き・計算」の力を向上させるために，時間確保に努める。 ・　基礎的・基本的な内容を教材研究し，再度，共通理解を図る。 ・　子どもたちの学ぶ意欲の向上が不可欠であるので，子どもたちが意欲をもって学習に取り組むための教材の開発や「問い心」を育てる支援の在り方を研究していく。 ③　「思考力」と「表現力」を育てる支援 「思考力」と「表現力」を育てるためには，授業の中のどこかに「学び合いの場」を設けることが大切である。そのためには，下記のことを大切にしていきたい。 ・　「自分の考えの道すじ」を大切にしたノート指導の在り方を研究する。 ・　「学び合いの場」を位置づけ，その学び合わせ方や支援の在り方を研究する。 ④　評価の研修 ・　授業研究を通して，評価基準の見直しをする。 ・　日々の授業の中で，一人一人の定着状況を的確に把握し，指導に生かす手だてについて研究する。

(3)　研究推進体制

校長・教頭 ―― 現職教育

少人数指導研修	全体研修	若年研修
少人数指導担当 ５・６年　佐野・片井 ３・４年　光家み・近藤 １・２年　森　・大平 理　科　高橋	現職教育主任　片井 副主任　森 ・授業研究 ・生徒指導研究　等	若年研修指導担当　森 ◎　藤田　浪越 泉田　有馬 氏家　高畑 尾崎

※　少人数加配教員が，未経験者から経験１年ということもあり，中心となって進めていくことはできにくいと考え，各学年主任を中心として進めることにした。

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

○　国語科において，現６年生は，学習状況調査から，前学年の学習内容が，「読む」「書く」という観点が弱いという結果が出た。そこで，「読む」「書く」という観点を重視した習熟度別少人数指導やＴＴ指導を実施した中のじっくりコース（低レベル児）の児童５名をピックアップしてみると，下記のような結果が出た。

【２学期４回の得点と平均点】

					平均
Ａ児	８１点	５７点	８１点	８６点	７６．３点
Ｂ児	６０点	５８点	５３点	５７点	５７・０点
Ｃ児	８５点	５９点	７４点	８１点	７４．８点
Ｄ児	４８点	４７点	４９点	６５点	５２．３点
Ｅ児	７４点	３４点	５１点	２３点	４５．５点
学級平均	85.6点	89点	84点	81.4点	８５．０点

上記の結果を考察してみると，これまでの一斉学習では，分からないまま進んでいたところを，じっくりコースで分かるように指導してきたための成果だといえる。

○　１年生が初めて取り組んだ習熟度別少人数指導（学級解体）「たしざん（２）」では，２コースに分かれて実践した。月１回ずつ定着度を追跡してみると，１月現在では，下記のような結果が出た。（１５問中）

【正解数】

Ａコース（１４名）　全問　１１名　１４～１０問正解　３名
Ｂコース（１２名）　全問　　６名　１４～１０問正解　３名
１０問～５問正解３名

上記の結果から，基礎的な内容を習熟度別少人数指導で分かっていれば，後は，繰り返し学習させることで定着できるものと考える。本当に個別指導が必要な児童は２名である。

○　５年理科の「てこのはたらき」では，習熟度別少人数指導を行い，自己評価もさせた。（学級解体）学習後，定着度を見てみると，県版テストでは，次のような結果が出た。

平成１４年度（ＴＴ指導を行った）　８０．６点
平成１５年度（習熟度別少人数指導を行った）　８１．８点

上記のことから，あまり変化はないが，「実験がおもしろかった。」「何回も発表できた。」「初めの予想と違っていたが，友だちの考えを聞いてなるほどと思った。」等，自己評価からは，別の観点で成果があったといえる。

２．今後の課題

○　「読み・書き・計算」の定着率アップをめざして，授業の中で，ドリルの時間に継続して取り組み，数値目標（下学年９０％　上学年８０％）を掲げ，努力していく。

○　全学年における少人数指導の日常化を図り，１３年度からの取り組みを見直しながら，全職員で実践を積み上げていく。少人数指導の効果的な在り方を探るためには，各学年で研究するとどうしても，打ち合わせの時間が問題になってくる。そこで，教科グループを編成して深い教材研究を期待したい。

○　国語における少人数指導が消極的になる原因には，各学年の各観点の力をどうとらえ，どう評価するのかが，はっきりしないからではないだろうか。各観点毎に，系統性を見直してみると，各学年で身に付けさせなければならない力について明確になってくるのではないか。

○　理科の学習状況調査の結果は，正答率が全体的によくなかった。設備上の問題があるが，どうしても，ＴＴ指導中心となる。習熟度別少人数指導を実施することで，若干の成果は見えたのだから，学習内容から考えて，来年度も５・６年で実施する方向でいいのではないか。そして，５年「もののとけかた」６年「ものの燃え方と空気」「電流のはたらき」については，習熟度別少人数指導を実施し，しなかった場合と比べ，少人数指導の効果について分析していきたい。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取組

○　評価基準に照らした日常的な実態把握
○　単元終了後・月末段階での評価問題による実態把握
○　考えの道すじの分かるノート指導
○　ノートチェックを通しての実態把握
○　学習状況調査における結果の分析
○　ＣＲＴ検査における結果の分析

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

○　基礎的・基本的な内容の定着を図り，思考力・表現力を身に付けさせるための望ましい少人数指導の在り方について，授業公開をする。特に，習熟度別少人数指導において，積極的に公開し，意見をいただく。
○　効果的な少人数指導の実践記録を誌上発表する。本年度は，主に，国語・算数・理科における習熟度別少人数指導の実践を発表する。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　□　１５年度からの新規校　■　１４年度からの継続校

【学校規模】　□　６学級以下　□　７～１２学級
■　１３～１８学級　□　１９～２４学級
□　２５学級以上

【指導体制】　■　少人数指導　■　Ｔ．Ｔによる指導
□　一部教科担任制　□　その他

【研究教科】　■　国語　□　社会　■　算数　■　理科
□　生活　□　音楽　□　図画工作　□　家庭
□　体育　□　その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　■　有　□　無